

農事組合法人「アグリ竹藤」代表

森本賢一郎さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「今は水田を守り、米作りを守るべき時。水田の維持は景観の維持、水の維持、災害の防止にもつながる」と水田の重要性を訴えるのは、京丹後市久美浜町竹藤地区の農事組合法人「アグリ竹藤」代表の森本賢一郎さん(69)。2015年4月に「集落の農地を守りたい」と有志5人の出資で法人を設立。「法人設立は未来への種まき」との思いで、農地集積などを進めてきた。昨年は、米「コシヒカリ」、酒造好適米「祝」、加工用米を12・9畝で生産。他に畑作でエダマメ、万願寺とうがらし、加工用キャベツ、ハウスでみず菜などを栽培する。「米作りを中心に収入の基盤を確立させたい」と、法人経営の黒字化を目指す。森本さん以外の4人の役員が40〜50代と比較的若いことも強みだ。

ブランド化へ米作り



▶ ハウスでみず菜を栽培する森本さん

法人の安定した経営を目指す森本さんは、法人設立から5年が経過した今、これまでの経験から「人手のかかる畑作よりも、面積に応じた収入が得られる一方で、面積の割に手間のかからない米作りの方が効率よく収益を上げやすい」と、米作りでの利益拡大を考えている。

竹藤地区も高齢化や過疎化が進み、耕作放棄地も増えているので、ますます法人の預かる農地が増えることも予想される。

想されるが、森本さんは経営規模の拡大は収益の拡大につながると前向きだ。「将来的には規模を拡大して雇用を増やし、後継者つくりにつなげたい」と話す。

17年からは里山水田オーナー制度を設け、農業体験と都会の人と農村住民の交流を重ねて「第2のふるさとつくり」を進めている。将来的に都会の人の移住につながればと期待する。今後の米作りについて、「米の需要

は減っていると言われているが、世界的に見れば人口の増加により近い将来は食料が不足してくる。海外からの米の需要が増え、輸出も必ず増えてくる」と森本さんは考えている。

「米は安売りをせず品質の良いものを高く売りたい」と考え、特別栽培米「竹藤米」としてブランド化に取り組み。きれいな水と米作りに適した土、そして米作りにかかる情熱でブランド化を進める。「米で収入が安定すれば、それから米以外に主軸となるものを作っていきたい」と抱負を語った。

.....

■法人所在地 京丹後市久美浜町竹藤13番地。(電) 0772(84) 0231(森本代表宅)。ホームページ <http://aketuji-kyoto.jp/>

■法人概要 2015年4月設立。役員5人、社員2人、パート5人。経営面積 12・9畝(コシヒカリ) 8・7畝、酒造好適米「祝」2畝、加工用米2・6畝、エダマメ90畝、万願寺とうがらし30畝、加工用キャベツ30畝、みず菜10畝など。農業機械 トラクター1台、コンバイン1台、田植え機1台、軽トラック2台。